

# 原発事故の現実 伝え続ける

東京電力福島第一原発事故がもたらした様々な現実を追う長期連載企画「プロメテウスのわな」は、6日で通算1千回になりました。シリーズは51を数えます。事故から3年半が近づく今も、深刻な放射能汚染に多くの人々が悩み苦しむ一方、政府は事故原因の究明なしに原発再稼働へと動いています。連載が伝えてきたこと、これからも伝え続けることの意味は何か。熱心な読み手の2人に話を聞きました。

連載が始まった2011年10月、政府はすっかり信用をなくしていました。放射能漏れやメルトダウンをすぐに認めず、なかなか情報を出さなかったの。政府から独立した機関による検証が求められ、国会の事故調査委員会の発足準備が始まっていました。

そんな折に連載が始まり、注目しました。官僚も政治家も名前から肩書、年齢まで出てくる。SPEDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）のことで外務省と米軍が連絡をとっていたなんて興味深かった。パワフルな企画だと思いました。

国会事故調が始まってからも大変参考になりました。事故をめぐって、どういう立場の人がどんな場面でどうかかわったのか、連載を読んでわかり、だれを呼んで話を聞くかの人選に役立ったのです。

登場人物が実名であることを最も評価したい。情報の信頼性を高めるからです。取材先に実名の了解をとって、記者も署名

国会事故調委員長  
黒川 清さん



くろかわ・きよし 2011年12月～12年7月、国会福島原子力発電所事故調査委員会の委員長を務めた。政策研究大学院大学教授、日本医療政策機構代表理事、元日本学術会議会長。

## 重ねた記録 隠れた真実に迫る

で報じるには勇気がいるはず。責任が明確になるから。いろんな記者が多様なテーマで書き、それぞれ違う視点があることも貴重です。

日本のメディアは政府や当局側の目線から書くことが多く、「発表もの」に頼りすぎています。でもこの連載は、記者が自分の意志で隠れた真実に迫ろうとしている。現場の生の声を丹念に集め、都合よく結論づけてまとめず、事実を淡々と記録しているのがいい。

大量の情報があふれる時代だからこそ、異なる視点からの正確で詳細な記録を残すことは大切で、その意味で、この連載には記録的な価値がある。確かな記録は時を経て事実の検証を可能にしてくれます。

連載は続けてほしい。原発事故は汚染水の問題ひとつとって、まったく解決していません。責任ある立場の人たちは失敗から学ぶ姿勢ができていない。事故を境に私たちの社会が変われるかどうか、世界からも問われているのです。